

三匹のあり

小川未明

青空文庫

川の辺かわほとりに、一本ほんの大きおおな木の立たつていました。その下したにありが巢すを造つくりました。どちらを見みまわしても、広ひろ々びろとした圃はたけでありましたので、ありにとっては、大きおおな国くにであつたにちがいありません。

ありには、ある年とし、たくさんな子供こどもが生まれましました。それらの子供こどものありは、だんだんあたりを遊あそびまわるようになりました。するとあるとき、それらの子こありのお母かあさんは、子供こどもらに向むかつていいました。

「おまえがたは、あのくるみの木きに上のぼつてもいいけれど、けつして、赤あかくなつた葉はにつかまつてはならぬぞ。いまは、ああしてど

の葉はを見みても、真まつ青さおだけれど、やがて秋あきになると、あの葉はが、みんなきれいに色いろがつく、そうなると危あぶないから、きつと葉はの上うえにとまってはならぬぞ。」と、戒いましめたのでありました。

ある日ひのこと、五匹ひきの子こありが外そとに遊あそんでいて、大おおきなくるみの木きを見み上げていました。

「なんとおおい大おおきな木きだろう。こんな木きが、またとほかにあるだろうか。」と、一匹ひきのありがいました。

「まだ世界せかいには、こんな木きがたくさんあるということだ。これより、もつと大おおきな木きがあるということだ。」と、ほかの一匹ひきの子こありがいました。

「お父とうさんや、お母かあさんは、あの木きのてっぺんまで、お上のぼりにな

ったといわれた。僕たちも、どこまでいけるか上つてみようじや
 ないか。「と、ほかの一匹のありがたいました。ついに五匹の子
 ありは、大きくなるみの木に上つていきました。そこで、中途
 までいった時分には、五匹とも疲れてしまつて、しばらく、枝の
 上に休んで、物珍しげに、あたりの景色などをながめていま
 した。

「なんという、大きな河だろうか。」といつて、一匹のありは下
 を見おろしていました。

「なんという広い野原だろう。」と、ほかの一匹が驚いていま
 した。太陽は、ちょうど木のでつぺんに輝いていました。する
 とそのとき、

「あの枝えだに、あんなにきれいな葉はがあるじやないか。あのそばまでいってみよう。」と、一匹ひきのありが叫さけびました。

二匹ひきのありは、あの赤あかい葉はこそ危険きけんだと、お母かあさんやお父とうさんがいわれたのだから、ゆくのはよしたがいいといいました。けれど、ほかの三匹びきのありは、どうしてもいってみるといいはりました。

二匹ひきの子こありは、そこから三匹びきのお友ともだちに別わかれて地ちの上うえへ歸かえることになりました。そこには、こいしいお母かあさんやお父とうさんがすんでいられました。そして、三匹びきの子こありは、赤あかい美うつくしい葉はを指めして上のほつていきました。三十分ぶんともたたないうちです。風かぜがきますと、いままでの、美うつくしい赤あかい葉はは、ぱたりと枝えだから空そらに離はな

れて、ひらひらと舞^まつて、下^{した}の川^{かわ}の中^{なか}に落^おちてしまいました。い
うまでもなく、その赤^{あか}い葉^はの上^{うえ}には、三匹^{びき}の子^こありがとまってい
たのでした。

三匹^{びき}のありは、あまり不意^{ふい}なこと^いにびつくりしましたが、気^き
ついたときには、赤^{あか}い葉^はの上^{うえ}に乗^のつて、川^{かわ}の上^{うえ}を流^{なが}れていたの
で、三匹^{びき}のありは、いまはじめてお母^{かあ}さんが、赤^{あか}い葉^はの上^{うえ}に乗^の
てはいけないといわれたことを悟^{さと}りましたけれど、どうすること
もできませんでした。

「さあ、どうなることだろう。」と、三匹^{びき}のありは、心^{こころ}細^{ほそ}
なって思案^{しあん}をしました。果^はてしなく、川^{かわ}の水^{みず}は、日^ひに輝^{かが}いて野原^{のほら}
の中^{なか}を流^{なが}れていました。どうして、どこへゆくというようなこと

などが、小さなありに考えがつきましよう。三匹のありは、一つところに固まつてふるえていました。そのうちに、また風が吹いて、赤い葉は岸に着きました。三匹のありは、やっとそこからは上がった、危うく命が助かったのです。そこは、思ったよりもいいところでした。美しい花が咲いていました。きれいな草の生えている丘もありました。三匹のありは、その日からはじめて、知らない土地に巣を造つて働いたのです。幾日か日がたつと、このあたりの土地にも幾分か慣れてきました。それにつけて、三匹のありは、父母のすんでいる故郷を、こいしく思ったのです。けれど、いくら思つても、帰ることができませんでした。三匹のありは、いつか、みんながお父さんになつたのであります。

そして、三匹びきのありにも子供こどもがたくさん産うまれました。けれど、ありはけっして、子供こどもらに向むかって木きの上のぼつても、赤あかい葉はに止とま
つていいとはいいませんでした。やはり、昔むかし、お父とうさんや、お母かあ
さんが自分じぶんたちを戒いましめたように、

「おまえがたは、けっして、赤あかい葉はにつかまってはならない。」
といったのです。

それは、いくらしあわせになっても、お父とうさんや、お母かあさんに、
あわれないことは、なによりも不幸ふこうなことであつたからでありま
す。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

※表題は底本では、「三一匹《びき》のあり」となっています。

※「生まれました」と「産まれました」の混在は、底本通りです。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三匹のあり

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>